

保育のアピール・感染症対策		(4) 家庭向けの啓発、支援	
施設種別	千城台東認定こども園 (公立認定こども園) (作成者職名) 主任保育士		
園概要	<p>園児数：83人 (うち、5歳児23人) 5歳児クラス：1クラス</p> <p>就学先小学校数：9校</p> <p>主な就学先小学校及び予定人数</p> <p>千城台みらい小学校7人、千城台わかば小学校3人、千城台東小学校3人</p> <p>こども園の周囲は閑静な住宅が並び公園が整備され、後ろには畑、歩くと田んぼや松林等もあり自然環境にも恵まれている。</p>		
<実施時期>	10月～3月		
<幼児期の終わりまでに育って欲しい姿に繋がる部分>			
健康な心と体、自立心、思考力の芽生え、言葉による伝え合い			
<活動のきっかけ>			
<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症の流行により、子どもたちの会話の中でも「コロナ」という言葉が頻繁に聞かれるようになった。予防目的としてマスクを着用させることを希望する保護者もおり、感染症や感染症予防についての意識が親子共に高まってきていると感じた。 ・これまで近隣の小学校と年3回行われていた小学校交流会が、新型コロナウイルス感染症予防のためここ数年中止になっており、小学生との交流や小学校を身近に感じる機会がほとんどなくなっていた。小学生の兄姉がいる家庭も少なく、少しでも小学校を身近に感じられる方法を模索していた。 ・新型コロナウイルス感染症予防のため、保護者の施設内の立ち入りを制限することになった。それまでは、保護者が支度のため保育室に子どもと一緒に入ることで、制作や遊びなど普段の生活の雰囲気を感じ取れていたと思うが、出入り口で引き渡しになったことで、保護者も園での生活が見えにくくなっているようであった。 			
<活動のねらい>			
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の体や健康に関心を持ち、健康に過ごすために必要な習慣を身につける。 ・小学校を身近に感じることで、就学に向けて親子共に期待を持つ。 ・自分の経験したことや考えたことを友だちや保育者、保護者に伝える。 			
<経験する内容>			
<ul style="list-style-type: none"> ・感染症予防に繋がる生活習慣を身につける (丁寧な手洗い、うがい、黙食、マスクの着用など)。 ・就学に期待がもてるよう、小学校周辺を散歩したり、個人面談を行う。 ・友だちや保育者、保護者と思いや考えを伝え合う。 			

<新型コロナウイルス感染症に対する活動の工夫>

- ・感染症対策については、室内外の消毒や清掃、玩具の消毒をこまめに行うと共に、手洗い、うがいの大切さを子どもたちや保護者に知らせた。
- ・行事や日々の遊び、生活については、3密を避け感染予防に努めて行うようにした。
- ・コロナ禍で小学校の様子を見に行ったり、交流会を行うことが難しかったため、小学校に相談し、散歩の際に外から学校の様子や校庭、遊具等を見せてもらえるようお願いした。
- ・小学校教諭との就学前の引継ぎの機会を利用して、小学生の身支度や荷物の始末、コロナ対策としてのマスク等の管理をどの程度、どのように子どもたちが自分で行っているのかを聞き取り、園での生活が小学校に繋がっていくように子どもや保護者に知らせた。
- ・毎年、年明けに就学に向けて年長児懇談会を開催していたが、人が集まる懇談会を中止し、個人面談を行うこととした。

<活動の内容>

- ・看護師による衛生指導を行い、手洗い、うがいの必要性を子どもたちにわかりやすくパネルシアター等を使用して伝えた。
- ・午睡がなくなった10月から、マスクやハンカチ、ティッシュを家庭から用意してもらい、室内で活動する際に使用するようになった。
- ・「食事中は大きな声で話さない」「うがいは隣り合う水道を使わない」、マスクの扱い方など感染予防のために必要なことは、ただ指示をするのではなく、「どうして必要なのか」ということをホームルームの時間などを利用して子どもたちと考える機会を設けるようにした。
- ・小学生が校庭で遊んでいる様子を見られるよう、小学校の業間休み（2時限目と3時限目の間の15分間の休憩）の時間を見計らい小学校周辺の散歩へ出かけるようにした。
- ・保護者と個人面談を行い、小学校への就学に向けて「入学までに育ててほしいところ」を共通理解したり、就学に対する保護者の不安や相談に応じるようにした。
- ・保育室の出入り口付近に「今日の保育」として、毎日の保育の内容をクラスごとに掲示した。

<活動でみられた子どもの姿>

- ・登園後や入室後に手洗い、うがいを丁寧に行う姿が見られるようになった。
- ・マスクを着用し始めた当初は「苦しいから外していい？」とマスクの着用を苦手と感じたり、マスクを他の子と共有のロッカーの中に置いてしまったりする姿が見られた。どうしてマスクを着用するのか、マスクをどう取り扱えばいいのか（マスクには菌が付着している可能性があることも踏まえ）ということ、ホームルームで話し合ったり、小学生は授業中もずっと着用していることなどを知ると、「今はマスクをした方がいい？」と自らマスクを着用したり、使用済みのマスクをマスク

<環境構成・教材や保育者の援助等>

- ・感染症対策として、マスクの衛生的な管理方法や鼻のかみ方、咳エチケット等について子どもたちにどのように知らせていけばいいか、職員間で話し合った。

マスクを着用して遊ぶ様子



ケースやビニール袋にいれるなど自分で管理する姿が見られるようになってきた。

- ・「先生に言われたからやる」ではなく、自分で考えて行動したり、友だち同士で「唾が飛んじゃうからお話ししないだよ」と教え合う姿が見られるようになった。
- ・小学校周辺を散歩している際、校庭で遊んでいる小学生を見て、休み時間にもマスクを着用していることに気がついた。フェンス越しに言葉のやりとりを行い、小学生のズボンについているポーチに何が入っているのか尋ねるとハンカチや予備のマスクが入っていることを教えてもらい「ぼくたちと同じだね」と小学生との共通点に気がついた。

業間休みの小学生の姿を見ている様子



お外でもマスクしているんだね！

- ・個人面談では、特に第一子を育てている保護者は「時間内に給食を食べられるだろうか？」「教室で座って授業が聞けるか心配」等、不安の声が多く聞かれたが、小学校のスタートカリキュラムについて説明したことで小学校でもバックアップしてくれることが分かり、安心したようであった。
- ・降園時に親子で「今日の保育（壁新聞）」を見て、子ども自身が「ここに僕が写ってるよ」「今日はドッジボールをやって負けちゃった！」と説明したり、保護者が「今度頑張っね」と励ましたりと、親子の会話のきっかけになったようであった。

・クラスでは毎日夕方ホームルームを行っている。その中で子どもたちと一日を振り返ったり、翌日の活動や遊びについて話し明日に期待を持てるようにしている。また、困っていることや感染症対策などについても、必要に応じて話し合いを行うようにした。

- ・「今日の保育」では、活動によっては視覚で楽しめるように写真も一緒に掲示するようにした。

「今日の保育」を親子で読んでいる様子



今日はドッジボールやって負けちゃった

今度は頑張っね

- ・個人面談では園の資料で就学に向けて園で進めていることを具体的に知らせたり、千葉市の資料（もうすぐ小学生！）を活用して小学校のスタートカリキュラムについて説明し、保護者が就学に向けて見通しがもてるようにした。

＜成果と今後の課題＞

- ・指示だけでなく、どうして必要なのかということについて子どもたちと考えるようにしてきたことで、自分で考え、気づいたり行動する力が育ってきた。一方的な指導ではなく、一緒に考えることが自立心や思考の芽生えに繋がっていくと考える。
- ・毎日ホームルームを行うことで、生活の中に区切りをつけると共に、皆でどうすればよかったのか等話し合うことで、思考力にも繋がっている。小学校では言葉や文章での表現が必要になるので、接続に向けて自分の思いを他者に伝える経験を重ねていく。
- ・年長懇談会ではなく個人面談にしたことで、それぞれの保護者のニーズ（第一子の場合は小学校の生活について等）に合わせて情報を提供することができた。
- ・「今日の保育」を掲示することで、保護者が園であったことを把握し、子どもとの会話のきっかけになっていた。子ども自身も、保護者がその日の保育の概要を理解していることで言葉が足りない部分を補ってもらったり、共感を得られやすいことで今日あった出来事や行事の様子を伝えやすいようであった。小学校では、連絡帳を通して子どもが学校であったことを保護者に伝えなければいけないので、就学前から親子の会話のきっかけを作ったり、言葉で伝える経験を重ねるようにしていく。
- ・課題として、園で当たり前のように行っていること（感染症対策や保育の質を高める園内研修等）について情報発信が不足していると感じられる。家庭との連携を図るにあたり、日々保育者がどのようなことに心を砕き、手をかけているのか効果的にアピールする方法を考えていく。

<カリキュラムコーディネーターのコメント>

○園の特徴ととりくみの工夫

千城台東認定こども園では、接続期に限らず子ども達と一緒に考えることに取り組んでおり、子ども自身が活動を自覚して、自立的・自律的に取り組む様子が見られます。園は、コロナ感染症の拡大によって、保育活動が変更・中止され、小学生との交流などの行事ができなくなりました。また保護者に対しても大きな影響があり、園では様々な対応や工夫をしました。

①子どものマスク着用への積極的な理解：本来、マスク着用は快い事ではありません。しかし担任保育者だけでなく、専門家である看護師が衛生について説明や指導を行うことにより、子ども達は現状を知り、マスクの取り扱いについての理解が深まったようです。子どもが理解できる正しい知識を提供することにより、「先生に言われたから」従うのではなく、自ら考えて判断することができるようになりました。友達同士で声をかける姿が見られたことは、これまでの保育や保育者の関わりによって子どもの中で育ってきたことが目に見える姿として現れたと考えられます。

②保護者懇談会から個人面談へ：コロナ禍では、保護者は送迎時に保育室に入室できないため、保育室や子どもの様子を見ることができなくなりました。またマスク着用や衛生習慣について等、園が家庭に協力を求めることが多くなりました。その代わりに、「今日の保育」を毎日掲示して、保護者の不安を払拭し、保育を可視化して保護者と子どもに示しました。また懇談会に替えて個人面談を行うことで、個々の不安に対応し相談しやすい環境を作りました。

○接続期の子どもの育ちの見取り：小学校との連携・接続＝交流のイメージが強いですが、小学校を訪問することのみが接続ではありません。接続期の子どもの育ちを見取り、育ちに合わせた関わりや指導は、子どもの育ちを保障する上で重要なことです。低年齢児には大人がすることや指示することが多くなりますが、成長につれて関わり方を変化させることが必要です。小学生が持っているポーチへの子どもの気づきを保育者が丁寧に取り上げた事例では、見取る・認める・見守るなどポジティブな見方をしています。このようなまなざしが子どもの自己肯定感・自己有能感の獲得につながります。

さらに子どもとの関わりだけでなく保護者に対して情報を発信し共有することが、保護者の不安や心配の低下や解消につながります。

○さらなる展開に向けて

保護者の心配の1つは「友達ができるか」ですので、今後さらに家庭との連携が進むことが求められます。園とは異なる社会の中でも自分の良さをのびのびと発揮し、新しい人間関係を構築できるようになるために、園で経験したいことを子ども達や保護者と共に考え、話し合うことを願っています。

【松崎洋子/まつざき ようこ】 千葉大学教育学部教授、博士(子ども学)、臨床発達心理士。主な研究テーマは、保幼小接続、乳幼児の運動発達と環境。国立教育政策研究所プロジェクト研究「幼小の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」委員等を務める。近著に『よくわかる！教育・保育ハンドブック—幼保連携型認定こども園教育・保育要領に学ぶ保育の質を上げる 10 のポイント』(フレーベル館・共著)、『幼児理解の理論と方法(乳幼児教育・保育シリーズ)』(光生館・共著)、『保育の心理学』(北大路書房・共著)他

